

令和6年度 特別の教育課程の実施状況等について

静岡県		
学校名	管理機関名	設置者の別
聖隷クリストファー中学校	学校法人聖隷学園	私立

1. 特別の教育課程を編成・実施している学校及び自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

学校名	自己評価結果の 公表ウェブサイト名・URL等	学校関係者評価結果の 公表ウェブサイト名・URL等
聖隷クリストファー中学校	聖隷クリストファー小学校ウェブサイト 令和6年度 聖隷クリストファー中学校 教育課程特例校実施状況（自己評価・学 校関係者評価） https://www.seirei.ac.jp/elementary-school/hyouka	左に同じ

2. 特別の教育課程の内容

(1) 特別の教育課程の概要

聖隷クリストファー中学校グローバルスクールコースにおいては、聖隷の建学の精神である隣人愛を教育の基盤・中心としながら、日々変化を遂げる国際社会の中で活躍するために必要な高い英語力と能力、知識を備えた人材を育成するため、聖隷クリストファー小学校に引き続き、一部科目において英語イマージョン教育を行う。また、「知的好奇心を尊重した探究学習」及び「教科の枠をこえた探究学習」を学びの柱とする。

(概要) 英語イマージョン教育を行う。

実施科目：社会、数学、理科、音楽、美術、保健体育、宗教、総合的な学習の時間、特別活動

(2) 学校又は地域の特色を生かした特別の教育課程を編成して教育を実施する必要性

2020年度以降の大学入試改革、学習指導要領の改訂に見られるように、今後ますますグローバル化への対応、問題解決型の主体的な学びが求められている。

浜松市内の本校近隣地域では、グローバル展開している大手企業の移転（ヤマハ発動機株式会社、株式会社スズキ部品製造、スズキ株式会社浜松工場新設等）が進んでいる。今後、英語の必要性がますます高まり、グローバルな課題を解決するには、高い英語力と自ら問題を解決していく力が必要と考えられる。

しかし、国際化の時代を迎えた中で、現在の英語教育は、必ずしもこの状況に対応したものとなっていないのが実状であり、生きた英語、使える英語の習得に向けた教育が必要と考える。このような状況を踏まえ、子どもたちの英語力を伸ばすことによ

り、真の国際化時代に対応できる人材を育成するため、外国語に特化した教育＝英語イマージョン教育ならびに探究型教育を実施する必要がある。

(3) 特例の適用開始日

令和4年4月1日

3. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

- ・計画通り実施できている
- ・一部、計画通り実施できていない
- ・ほとんど計画通り実施できていない

(2) 実施状況に関する特記事項

英語ネイティブスピーカーの教員を HR 担任に配置し、教科の学習以外の場面においても生徒が英語を活用することができている。英語科の授業においては、生徒の習熟度に合わせて一部習熟度別の授業を行っている。

(3) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

- ・実施している
- ・実施していない

<特記事項>

授業見学会や教育セミナーを実施し、本校の特別の教育課程に基づくイマージョン教育を広く保護者・地域住民に周知している。

4. 実施の効果及び課題

(1) 特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している学校の教育目標との関係

聖隷クリストファー中学校は、キリスト教の隣人愛の精神を基本に、真理と愛に立脚した国際的視野を持ち、世界の平和と人類の福祉に積極的に参画する人物の育成を目指している。この目標に対し、グローバルスクールコースでは、本特例の実施により、これからのグローバル社会で活用するための高い英語力を育むことができている。定期的実施している英語力判定テスト (TOEFL Junior/Primary) のデータによれば、本コースに所属している中学生全体の 94%が英検準 2 級相当以上の英語力を身に付けていることが示されている。しかし、課題としては、英語 4 技能の中で、依然としてスピーキング能力が他の能力に劣る傾向が見られるため、今後も生徒が活発に英語を用いる環境を整えていく必要がある。

(2) 学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

多国籍の教員が様々な教科を担当することにより、生徒が日常的に英語という言葉だけでなく、異なる価値観や文化に触れる環境を実現することで世界に開かれた視野を養いながら、偏見や差別の無い国際社会の形成に寄与する力を育んでいる。それと同時に、国語教育や建学の精神である隣人愛を育む教育も重んじており、他国の文化や普遍的価値観と対比しながら自分自身を見つめ、自国の文化や自分自身の在り方を探究的に学ぶことができている。今後も、英語による各教科の学びを通し、英語力の向上に加え、生徒が多様性を受け入れ、他者と協働し、より良い社会を形成していく力を育んでいきたい。

5. 課題の改善のための取組の方向性

4に示すような課題を踏まえ、今後、生徒が英語で話す機会を増やすために、海外の学校との交流プログラムの実施等を模索していきたい。